

捻くれ者とスクールアイドル

ショコラMEN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡には実は幼馴染の国木田花丸いた。

八幡と花丸は小さい頃ある約束をした……

これはそんな2人の恋の物語

※ストーリーとしては原作を絡ませたりオリジナルを入れたりしているのですがこのところをわかって頂けると幸いです。（基本はオリジナルです）

メインは八幡と花丸なのでそのほかのキャラは出番は少なめだと思います。

年齢とかは原作と同じです。

暇つぶしに「スパイな彼とAqours」という作品も投稿しているのでそちらのほうもよろしく願います。

目次

23話	22話	番外編	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
88	84	81	78	75	72	69	65	61	57	54	51	47	39	36	32	29	26	21	16	13	7	4	1

H a p p y b i r t h d a y ! 国木田花丸

1話

俺は比企谷八幡だ。(知ってるか)

今は静岡県の沼津に来ている。なぜかって？

それは……………

「あつゝゝゝい!!」

由比ヶ浜の声が部室に響く。

「どうしたのかしら? 由比ヶ浜さん」

「ゆきのくん! あついよ!!」

「それは何回も聞いたのだけれど…………」

「あつ! そうだ海行こうよ!」

「(うわっ、なんかめんどくさくなりそう…………)」

「私は構わないのだけれど」

「ヒツキーは?」

「いや、俺には用事が…………」

「じゃあ今週の日曜空いてる?」

「いや、俺行くなって言っけないけど?」

「どうせシスタニくんの事だから暇ではないのかしら?」

と、こんなことがあり無理矢理連れてこられた。

「てか、なんで一色までいんの?」

「えー、ダメなんですか?」

「あざといからな」

「それ理由になってませんよ!」

それにしても沼津とかに来るの何十年ぶりだよ。

そういやあの時のあの子元気かな?

「どうしたの？ヒツキー」

「なんでもないぞ」

.....

その後3人にさんざん振り回されこの世の終わりかと思ったたぜ☆
海で遊んだあとは色々ぶらぶらしていた。

その後今日泊まる宿へと向かった。

「ここは自然がいっぱいいいですねー」

「そうだねー」

確かにそれは一理あるな。でも、マツ缶がないのはマイナスだな！

「あれかしら？」

雪ノ下が尋ねてきた。

「ああ、たぶん」

その後は特に何もなくて淡々と過ごしていた。

「俺ちよつとコーヒー買ってくるわ」

そう言って部屋をでた。せっかくだし外の自販機に行くことにした。

「たまにはブラックでもいいか……」

マツ缶マジでなんでないんだよ!!

「(風気持ちいいな)」

やっぱりこの空気はいつ来ても落ち着く。

その理由は未だに分からない。

その後帰ろうとした時……

女性が後ろから不意に抱きついてきた。

「ずっと会いたかったぞら」

「怖いよこの人……ぞら?」

「忘れちゃったの? はちくん」

はちくんって言う奴っていったら……

「花丸!」

「会いたかったよ、はちくん」

あんまり抱きつかれるとその柔らかいものが当たるのでやめて頂きたいところなんだが……

「久しぶり、花丸」

「久しぶり、はちくん」

このあと色々話をしていた。どうやら花丸は今有名なスクールアイドルをやっているらしい。

俺にはわからんが、いつも本ばかりだった花丸がこんなにも変わるとは……

「またね!」

「おう」

そう言っ行ってしまった。ラインも追加してもらいこれでもいい会いに……何考えてるんだろ?

これが彼女との再会

続く

2話

あの日、花丸に会ってからは何もなくて……もなく。

かなり花丸と話し込んでいたのか帰ってくるなり3人に

「あら、遅かったのねオソ谷くん。」

「なにしてたのヒツキー?」

「なんか言ったらどうですか?せ・ん・ぱ・い」

「ダレカタスケテー!!」

結局助けを求めても「チョットマツテテー!」は聞こえてこず。

まあ、あとは察してくれ……

そして今は夏休みが終盤に入ってきた。

全国の小中高生は今頃「宿題終わってないし!」とか言っているの
だろうが俺は違う!夏休みを有意義に過ごすために夏休みに入る頃
には終わらせておいたのだよ!

「ゲームして寝てるだけなのにねー」

「おい、地の文を読むな」

「何の事かなく?」

これは我が愛しの妹小町だ。ほんと小町ってエンジェルだよな!

「ねえ、ごみいちゃん!」

「なんだ?」

以外とその言い方傷つくな(涙)

そう思ってコーヒーを口に含んだ時だった。

「花丸ちゃんにあったんだってね!」

「ぶっ……!」

衝撃的な発言に思わずアニメのようにコーヒーを吹いて
しまった。

「なんで知ってるんだよ?」

「そりゃ、花丸ちゃんの連絡先持ってるからだよ!」

「なんで持ってるんだ?」って言うベタすぎる質問はしないでおこーう。
どうせ「お兄ちゃんのために小町の力をフルパワー使って交換したん
だよ!あつ今の小町的にポイント高い!」とか言うんだろうな。

「小町のセリフ読んじやうとか小町的にポイント低い!」

「小町ちゃん、さらっと心の中読まないで。」

「幡と会った日の夜……」

今日は小町ちゃんから連絡があつてはちくんが沼津に来るって聞
いて探したけどあんなにあっさり見つけちゃうとは思わなかったず
ら 小学校以来に会っけどなんかカツコよくなつてたずら……

「マル何考えてるんだろ／＼」

「また会いたいな……」

でも、いつでも会えるよね!はちくんと連絡交換したし!ちよつと
連絡してみようかな?

少し緊張しながらスマホと向き合った。誤字がないか確認した。

『今大丈夫ずらか?』

返ってくるかな?……

『おう、大丈夫だぞ。』

き、きたずら!

『その、ちよつとお話したいかなつと思つて……』

『いいぞ』

言葉が素っ気なく感じるけど、それは昔から変わんないずら。で

も、はちくん優しいから素っ気なくしている感じを装っているだけっ
てすぐ分かるぞら！

それから1時間ぐらいは話してたかな？

やっぱりはちくんと話していると楽しいなく

なんだろ……………

オラやっぱりはちくんのことが……………

続く

3話

あれからはずっと携帯での連絡が続いた。

小町に「ニヤニヤしながら携帯見るとか小町的にポイント低いよお兄ちゃん……」なんて言われても負けないもん！負けるな八幡！頑張れ八幡！次回八幡死す！デュエルスタンバイ!!あ、もうこれで物語終わってもいいんじゃない……」「止まるんじゃないぞ」

おっと、オ○ガ団長にここまで言われたら断れないな。

「やっと着いた」

頭の中でカオスな妄想を繰り返している今回と今回の目的地に着いた。

ここは、今回行われるラブライブの東海地区予選の会場だ。普段なら来たいとは思わないのだが……

3日前……

『花丸って、スクールアイドル？やってたよな？』

『そうずらよ』

毎回思うが、この子LONEする時も語尾にずら付けるよな。うん、可愛い。

『実は3日後にラブライブの地区予選があつてね。』

『そうなのか。なんかそんな時に連絡して悪いな。』

『そんなことないよ！はちくと話していると楽しいし。』

『お、おう』

なんか俺恥ずかしくなってきたわ／＼／

あれ？俺キャラ崩壊してね？

『その、よかつたら地区予選見に来てほしいずら！』

『べつに予定はないし、いいぞ。』

『ほんとずらか?!ありがとうずら！』

〜回想終了〜

てなわけで俺は今ここにいるわけだ。

「うむうむ、貴様の事情はよくわかったぞ！」

「なんで材木座がここにいるんですかね？」

「決まっているだろう。スクールアイドルを見るためだ！」

「あっそ」

「え、なんか反応薄くない？」

「あれ？俺さつきまで誰と話してたっけ？……」

「ぐっ！さすがの我でも、心に刺さるぞ!？」

とりあえずライブまで時間あるしテキトーにぶらぶらしとくか

……

「おっと、我は少し用事があるからまた後でだな友よ！」

「俺はお前を友だとか思ったことは微塵もないぞ？」

「……」

その後結構しよんぼりしている材木座とは別れて会場から近いところをぶらぶらしていた。

「腹が減ったな」

スマホの時計を見れば時間が正午を表示していた。

「はちくん?」

落ち着いたやわらかい声が聞こえてくる。ついに俺にも幻聴が

……

「無視しないでほしいぞらー！」

「おう、すまん。」

「来てくれてありがとうぞら♪」

「おーい！花丸ちゃん何してるの?」

「あ、千歌ちゃん」

「(俺このままここにいたらまずい気がするんだが…)」

「花丸ちゃんこの人誰？」

「はちくんずらー！」

「はちくん？」

いやいや、花丸さん。そこはフルネームとかで言つてよ！

「あ、どうも。比企谷八幡といいます。花丸とはただの知り合い……」

「はちくん？」

そんなジト目で見ないで！怖いよ花丸様！

「はちくんとは幼馴染みたいなものずら」

「そうなんだ、あつ私は高海千歌！よろしくね！」

高海千歌だっけか？なんかこの子めっちゃ元気いいな。

ぼつちを極めた俺とは正反対だな。

「じゃあ私ほかのどこ行つてくるからお二人さんまたね」

そう言つてどこかへ走つていった。

「なんか勢いがすごい人だな」

「あはは、そうずらね」

ぐうぐうとお腹がなる音がした。

／／／

何これ、可愛い。

「時間あるか？」

「うん」

「どっか飯でも行くか？俺が奢るから」

「いいずらか？」

目をキラキラさせながら花丸は言った。

「おう」

結局あの後飯を食つてそろそろライブの時間前になった。

「はちくん行つてくるずらー！」

「おう、その……」

「？」

「が、がんばれよ。応援してる……／／／」

「ずらー！／／／」

それにしてもここの会場大きいな。入ってくるなりビックリしたわ。

「我も最初はビックリしたぞ！」

「なんでいるんだよ。あと、勝手に心の中を読むな」

あつ、そういえばAqoursっていつ出るんだっけ？

「最後だぞ」

「助かった。じゃなくて勝手に読むな」

あつという間にAqoursの順番となった。ほかのスクールアイドルを見ていたがかなり迫力があつた。なんというかみんな魅力的だった。

「八幡よもうはじまるぞー！」

「へいへい」

てか、横でサイリウム振り回すのやめてくんないかな。

肩に当たりまくっているんだが……

その時ステージにひとつの光が照らされた。

メンバー全員でこれまでの軌跡を語っているようだった。あまりの斬新さに驚いたのは俺だけではないだろう。

「うう」

「えっ、材木座泣いてんのか?」

「当たり前であろう！こんな話聞いたら……うう」

そんなやり取りをしていると曲が始まった。曲名は、

「MIRAI TICKET」だったよな。なんだろうな……

何故か感動してくるんだよなあ。

ダンスもすごい。本にしか興味のなかった花丸がスクールアイドルを楽しそうにしている。俺にはあまりにも眩しすぎた。

「良い歌であったな！」

「そうだな」

ライブも終わり今は会場の外にいる。帰ろうかと思った時に花丸から電話がきた。

「もしもし」

「あ、もしもしはちくんずら?」

「おう」

「その、今日は来てくれてありがとうずら!」

「おう、良かったぞ」

「えへへ、ありがとうずら♪」

「じゃあそろそろ帰るわ……」

「あつ、はちくん」

「なんだ?」

「その、駅まで一緒に行きたいかな……なんて／＼／＼」

「いいぞ」

「ほんとずらか!?!」

その後花丸と合流して駅へと向かった。その道中は不思議と話はずんだ。

「そういえばはちくんって何か部活入ってるずらか?」

「入ってるぞ。奉仕部だ。」

「奉仕部?」

「簡単に言うと人助けみたいなものだ」

「はちくんは優しいからお似合いずら♪」

「優しくねーよ」

「ふふふ♪」

「どうしたんだよ?」

「またこうやってはちくと話すことができてるマルは嬉しいずら♪」

「そ、そうか」

突然くるのやめて!今一瞬ドキツとしたわ!

「あ、着いた」

そう言うと花丸は少し悲しい顔をした。

「あの、はちくん」

「なんだ?」

「今度ははちくんのところに行きたいずら」

「べつにいいぞ。小町も喜ぶと思うし……」

「ありがとうすら！」

パアツと笑顔になった。破壊力スゲーなおい。

「またね！はちくん！」

「おう、じゃあな」

10年ぶりにあつた幼馴染は今日とても輝いてた。

でも、その一方で何故か置いていかれそうで少し不安になった……

「行っちゃったすら……」

また会えるって心の中では分かっているのに、やっぱり寂しいな。胸がキュッとする。早くはちくんのところに行きたいすら。マル、はちくんのせいでちよつとだけわがままになっちゃったみたいすら……

続く

4話

「っ、だりーな……」

今日は夏休みが終わり登校日だ。また社畜生活が始まると思うとこの先が怖くなってきたぜ☆

「小町おはよう」

「お兄ちゃんおはよう！」

うん、今日の前に天使がいるよ。今日もいい天使っぷりだな。さすが我が妹だけはある。

「ごちそうさまでした！」

いつも通り食事をすまして、いつも通り学校へ行く。

そしていつも通り小町は俺の自転車の荷台に乗る……

は？

「なんで乗ってるの？」

「え、お兄ちゃんはこんなか弱い妹を歩かせるの？」

意地悪な顔で言うがもう慣れてしまったのでとりあえずそのままにしといた。

学校に着くなり俺は寝る体勢をとった。すると……

「おはよう！八幡！」

「……………」

「こ、ここにも天使が

「八幡？」

「毎朝、俺のみそ汁作ってくれ」

「えっ、どういう意味八幡!？」

「すまん忘れてくれ」

こんな緩い会話をする。それにしても地区予選からあんまり花丸に連絡することがなくなったな。あつちから連絡がくるわけでもないしな。なんか今度こっち来るとか何とか言ってたがいつ来るんだろうな。

「八幡そろそろ始業式だよ！」

「おう」

そういや今日は始業式だけだしはやく帰れるな。

「あつーヒツキーやつはろー!!」

「断る」

「まだ何も言っていないしー!」

「直感だ」

「今日学校終わったらゆきのんと一緒にららぽ行くんだけどヒツキーもどうかなって」

そんな上目遣いでお願いしないでくれますかね？

すげー断りにくいんだが……………

「なんか面白そうだね!僕も行っていいかな?」

「彩ちゃん来てくれるの!?ありがとう!」

「由比ヶ浜、俺も行く」

「ヒツキー…………」

少し落胆した感じの由比ヶ浜。

「ちもかく!学校終わったら校門前で集合ね!」

「うん、わかったよ!」

「おう」

「やっぱり朝日は気持ちいいぞら」

今日は登校日すら!結局ラブライブの地区予選では落ちてしまったけどみんなで頑張ったから不思議と清々しかったぞら。あとは、はちくんが見に来てくれたことが頭から離れないぞら／／

あれからちよつとしか連絡取れないけどまた会いたいなあ。

「あ、そろそろ時間ぞらー!いつてきます!」……………

「あ、ルビィちゃんおはようぞらー!」

「花丸ちゃんおはよう!」

「あと善子ちゃんもおはようぞら」

「善子いうな!ヨハネ!!」

「はいはい、わかったぞら善子ちゃん」

「だからヨハネよ!!」

ルビイちゃんと善子ちゃんといつものような絡みをする。なんかパターン化してるぞら。

「だから善子いうな！」

「心の中を言うのはやめるぞら♪」

「あ、はい……」

「花丸ちゃんが怖いよー」

今日は始業式が終われば学校はまた明日ぞら。練習も今日はないし家で本を読もつかな？

あ、はちくんに連絡してみよつかな？……………

続く

5話

あの後俺は由比ヶ浜たちから逃れるためにはやく学校から出ようとしたら……

「どこへ行くのかしら?」

「ヒツキー?」

「すいませんでしたあああ!」

はい。このざまである。前の話で行くとか言ってた?

戸塚が急に行けなくなったって言われたんだよ。この3人で行くのかよ……

「あつ!先輩方!!」

「いろはちゃんだ!やつはろー!」

「こんにちは!ところで何してるんですか?」

なんかこの展開まずいな。

「実はね、今日3人でららぽ行こつて言ったのにヒツキーが帰ろうとしたから止めてたんだよ」

「そんなんですか。先輩最低ですね!」

「そりやどうも」

「由比ヶ浜先輩、私も一緒にららぽ行っていいですか?」

「大歓迎だよ!ねっ?ゆきのん!」

「ええ、大歓迎よ。」

「ありがとうございます♪」

やつぱりこの展開だよな。絶対作者を許さん……

「とりあえずお昼にでもしよつか?」

「そうですね」

「そうね」

「そうだな」

昼か、やつぱりアレだな。

「よし!俺がオススメのところに連れてってやろう!」

「えっ、ヒツキー美味しいところ知ってるの!?!」

「ほんとですか!？」

「あてにならなそうなのだけれど……」

「ねえ、ヒツキー」

「なんだ？」

「サイゼ以外の選択肢ないの？」

「はあ?ないに決まってるだろ」

「もういいです!ここにしましょ!」

「そうね。」

「やっぱりサイゼ最高だな!安いし美味しいしもう完璧だろ!ここに一生住みたい……」

「ダメ人間ですネ」

「人の心を勝手に読むんじやねえよ」

その後はなんか服やら雑貨やらウロウロしていた。

べつに何かあった訳じゃないがこういう普通なことが味わえるのは俺にとつてかなり嬉しかった。

「んじや、そろそろ帰るか」

「そうだね」

「そうね」

「また明日もいきますか?」

一色がすげー悪戯顔で言ってるんだが……無視だな!

「行きたいのは山々なんだけど明日は家族と出かけるから無理かな。ごめんね!いろはちゃん。」

「私も少し用事があるから無理だわね。ごめんなさいね。」

「いえいえ!また今度行きましょう♪」

今は電車で揺られている。ガタンゴトンと少し気持ちのいい揺れが俺たちを襲う。眠い!!

ああ明日と明後日休みだからずっと寝るけどな!
あ、着いたか……」

????????????????????

うわー、ラノベとかでよくあるやつだな！ここは俺の良心が痛むが無視だな、うん。

「マルはこれから会わないといけない人がいるので……」

マル？ん？はい？

「そんなこと言わずにさー」

そう言つて男は花丸の腕を強引に握つた。

そして俺は耐えきれなくなった……

「おい、その手はなせよ」

「ああん？誰だお前？」

「俺はこいつの友達だ。」

「だからなんだよ！」

「その手をはなせつて言つてるんだよ。」

「君たち何してるんだ！」

「あつ、ヤベー！」

男は警察官を見るなりすぐ逃げていった。

「おい、大丈夫かはなま……る!!」

突然花丸は俺に抱きついてきた。なんか柔らかいもの当たつてるううう!!

「ん？」

よく見ると花丸は少し目から涙を流していた。

それもそうだな。いきなりあんなことされたらな。

俺はついつい小町にやるように花丸の頭を撫でた。

「(はちくんに頭撫でられてる／＼／＼)」

少し落ち着いた花丸を連れて近くの公園のベンチにもたれかかった。

「ほら」

「ありがとうずらー！」

やっぱりマツ缶はしみるぜく!!

「今日は助けてくれてありがとうはちくん!!」

「気にするな。」

そういえばなんで花丸が千葉にいるのだろうか？

「花丸はなんでここにいるんだ？」

「はちくんの家に泊まるためずら♪」

「……………はああああああああ!？」

続く

6話

あのクソナンパチャラ男DXにナンパされていた花丸を助けだし（警察のおかげ）今公園にいるのだが……

「泊まるのお!？」

失礼しました花陽ちゃんが出てきてしまいました。

「小町ちゃんがね、勉強合宿で今日と明日はいないからはちくんのことよろしくって言われたすら」

「そういやあいつそんなこと言ってたな。小町のところ夏休みが終わるの早かったしな。」

「でも、なんで花丸なんだ?」

「ダメ……すらか?」

「いやいや、そんな潤った目で上目遣いしないでくれますかね? 八幡に効果抜群ですよ!」

「べつにいいけど」

「よかったすら〜♪」

ほんと花丸さんずるくないですか?

これじゃあ俺のSAN値が減っていく自信しかないな!

「あ、はちくん何か食べたいものとかあるすらか?」

「てか、花丸が作るのか?」

「そうすらよ」

「なんか悪いな……」

「そんなことないすらよ?」

「お、おう」

「それで、何か食べたいものあるすらか?」……………

今は花丸と一緒に近くのスーパーに来ている。

来るのはいいんだが……

「あらあら若いっていいわね〜」

「そうね〜」

「羨ましいわ〜」

「恥ずかしい！（ずらー！）」

八幡死にたい……

穴があつたら入りたいてよく言うがほんとに入りたい気分だ。

「は、はちくん!？」

「な、なんだはなまりゆ!？」

お互い緊張しすぎてこんな感じだ。俺にいたっては噛むレベル！

「ふふっ」

「どうしたんだよ?」

「はちくん思いつきり噛んでたから……ふふっ」

「笑うなよ」

「ごめんずら……ふふっ」

なんだかんだいってあの変な緊張はどこかへいった。その後買い物イベントを終わらせてから少し暗くなった空を見上げながら道を歩いている。

「そーいやスクールアイドル?はどうなんだ?」

「楽しいずらー!今度またラブライブがあるからそれに向けて頑張ってるずらー!」

「そっか」

「はちくんは?」

「んー、まあぼちぼちだな」

「なんかあんまりいい感じじゃなさそうずら」

「う、うるせー!」

「凶星ずら♪」

和やかな会話をしていると我が家に着いた。

「お邪魔します」

「誰もいねーんだけどな」

そう、俺の母親と父親は社畜として立派に頑張っている。しかも今日に限っては出張である。なんなら小町もいないんだよな。花丸と2人………。まずい。何がまずいかって?お前らはこの状況

を望んでるかもしれないが年ごろの男女二人つきりでとか色々ヤバ
いんだよ。

「どうしたずら?」

「っ、なんでもない」

「じゃあさっそく作るずら!!」

「何か手伝ことあるか?」

「大丈夫ずら!はちくんはテレビでも見てて!」

「おう」

じゃあさっそく録画してたポピテピピックでも見ますかね。ほん
とあの独特な世界観いいよな!

「〜♪」

「(花丸が嫁にしか見えねえ……)」

そんなこと考えてたらいい匂いが俺の鼻を通った。

「はちく〜んできたずらよ〜♪」

今俺の目の前に天使が………!!

「いただきます!」

「!?これ美味いな」

「ほんと!?よかったずら〜」

お世辞とかじゃなくてほんとに美味しかった。

嫁スキル極めてるな!

「(ぶ)ちそうさまでした!」

「マジで美味しかったわ。ありがとな花丸」ニコッ

「っ!どういたしまして／＼／＼」

「あ、風呂どうする?」

「ふえ?」

「(えっ、何それかわいい)」

「どっちが先に入るかって事だよ」

「はちくんからでいいよ?」

「わかった。じゃあ入ってくるわ」

「いってらっしやいずら〜」

「ふう〜」

我ながらおっさんみたいに言ってしまう。それにしても今日はほんと俺には刺激が強すぎるいい!!

まあ楽しいからいいか……

「でたぞー」

「あ、おかえりずら」

「花丸も入ってこいよ」

「ずらー!」

「はあ〜」

今湯船に浸かっているんだけどこの湯船さつきまではちくんが入ってたんだよね……………//
//

なんか変な感じずら//
//

「お風呂ありがとうずらー!」

「おう、じゃあ寝るか」

「あの…………」

「ん、どうした?」

「…………今日一緒に寝てもいいずらか?//
//」

「……………えっ?」

なんだこの状況は!小町の部屋で寝てもらおうと思ったのになぜこんなことになってるんだ!?

「はちくん起きてる?」

「起きてるぞ」

「今日はごめんね。マル迷惑だったよね…………」

急にそんなシユンとして言わないでくれよ…………

「そんなことないぞ。その、あれだ…………」

「？」

「今日は来てくれてありがとう……」

「!？」

「おやすみ」

「ふふっ、おやすみなさい」

続く

7話

「すうすう」

「……」

ひとつのベッドに2人。俺と花丸……ん？

花丸？花丸……花丸!?

オーケー落ち着け八幡。これは幻だ。そう幻だ……

「んっ、……はちくんおはようずらく」

「(幻じゃなかったか……)」

「おう、おはよう」

「今日は楽しみずらく」

そう、今日はせつかく花丸が千葉に来たのでここら辺のところ遊ぶことになった。なんかデートみたいだな。

「デート!?!／／／」

「勝手に心の中読むなよ」

楽しみにしていたのは花丸だけでなく俺も楽しみにしていたということはここだけの秘密である。

「今日は俺が朝飯作るわ」

さすがに昨日作ってもらったお礼ぐらいしないとな。

「いや、マルが……」

「じゃああれだ手伝ってくれ」

「わかったずらく！」

朝飯を終えて今から出かけるのだが……

「どう……ずらく?／／／」

服のことを聞いているのは分かっているんだ。

けど、そんなに赤い顔しないでもらえますかね？

言うの恥ずかしいってばよ!おっとナ〇ト出ちやった。

「その……似合ってるぞ／／／」

「うん!ありがとうずらく♪／／／」

そのあととりあえずショッピングモールに向かった。

「ん、どうした？」

「な、なんでもないぞらー！」

「ん？」

花丸はさつきずっと見ていたクレープ屋さんから目線はずした。さすがの俺でも分かる。

「じゃあ小腹すいたしクレープでも食べるか？」

「うんー！」

そのあと選んだ結果

花丸は色々なフルーツと生クリームがたくさんあるクレープで俺がバナナと生クリームがあるクレープにした。

「美味しいぞら〜♪」

なにこの子かわいい

「はちくんあーん」

「おい、なんでそうなる!？」

「はちくん食べたそうだったから」

「いや、あのな」

「あーん」

「んっ、美味しいな」

「ずらー！」

「んじゃ俺のいるか？」

「うんー！」

「あーん」

「んっ、美味しいぞら〜♪／／／」

「そりゃよかった」

ダメだな。多分いつもの俺とは想像出来ないくらいキャラ崩壊してるぜ☆

そのあとは雑貨とかを見て回った。

「これかわいいぞらー！」

「ブレスレットか」

黄色がメインのブレスレットまさに花丸って感じだな
「ならいるか？」

「えっ？いいよ。ご飯も奢ってもらってるし……」

「別に大丈夫だぞ。」

「じゃ、じゃあマルがはちくんの買うからはちくんはマルのを買って欲しいぞら」

「なんで？」

「ペアルック？にしたいから……ぞら／＼」

「……」

何この子！俺じゃなきや即死だぞ！

「わかった」

「ありがとうぞら！」

そのあとそのブレスレットを付けて顔を真っ赤にせずと上機嫌な花丸。そんなに嬉しかったのか？

「ふふふっ♪／＼」

「あれって……」

続く

8話

あのあとは色々とはかの店に寄ったりしていた。

あつという間に時間が過ぎ見送る時に花丸は少し寂しそうな顔をしていた。

「また……会えるよね？」

珍しく語尾にずらがついてこなかった。

「おう」ニユツ

「っ！じゃ、じゃあねはちくん！」

「おう、気をつけてな」

俺は花丸が駅の中まで行く所とところまで見送った。

さてと、帰ったらポピテピピックでも見ますかね。



「さて、今日からまた学校が始まった。しかも来月には修学旅行とかいうクソなイベントが待ってる。ああ、家に帰ってえー」

「ははは、大丈夫八幡？」

「戸塚お前だけいれば最高だ」

「あ、ありがと？／／／」

「あつ、ヒツキーと彩ちゃんやつはろー！」

「おはよう由比ヶ浜さん！」

「相変わらず馬鹿みたいな挨拶だな」

「う、うるさいし！」

こんな日常も悪くないと思ってた時期が俺にもありました。

放課後……

俺はいつものように奉仕部のため部室へ向かった。

そこには何故かすでに由比ヶ浜と雪ノ下と一色がいた。

「うっす……」

あつれ〜？なんか空気が重たいなー。俺なんかしましたっけ？

「比企谷くん」

「ピツキー」

「先輩」

なんかめっちゃ声が冷たいよ！今にも凍え死にそうだけ☆

「これはなんですか？」

「ん？」

一色はある写真をスマホで見せてきた。

これは……………昨日の俺と花丸の写真!?

「……………」

「何か言ったらどうかしら？比企谷くん」

「どういうことだし！」

「きっちり説明してもらいますからね！」

このあとめっちゃ聞かれた。

とりあえず幼馴染とは言っておいたら……

「あなたに幼馴染がいたのね」

「なんかかわいいそう……………」

「物好きなんですネこの子」

なんかめっちゃ俺に対しての悪口にしか聞こえないのだが！

この後は何か特別に何かがあった訳でもなくそのまま終了した。

余談だが帰りに何故か雪ノ下たちにアイスを奢らされた。みんなハーゲンダッツばつか買っついていきやがった！

一色にいたっては「これもこれもほしいですー！」キャピツみたいな感じで3個ぐらい持ってきやがったしな。

「ただいま」

「あ、おかえりお兄ちゃん！」

「おう、小町愛してるぞー！」

「キモっ」

「小町ちゃん、キャラ崩壊してない？」

「ともかく早く着替えてきて！」

「お、おう」

あれ？小町っていつからこんなに俺に対してキモイとか言ってきたんだっけ？お兄ちゃん悲しい！

「ん？」

携帯の液晶を見るとそこには由比ヶ浜という表示が。

「もしもし」

「あ、もしもし！ヒツキー？」

「おう、なんだ？」

「あ、あのねまたみんなで沼津行こうって話になったんだけどどうかな？」

「あ、俺は暇じゃないから……」

「わかった！今週の日曜日の10時に千葉駅集合ね！」

そこで電話が切れた。俺の意見は聞かないというわけか……

「沼津か……」

まさかまた行くことになるとはな……

まあ、花丸に会えるしって何を考えてるんだ俺は……

結局用事があって行けなかったんだがな……

続く

9話

八幡の家に泊まってたから1週間後

今日の目覚めは最高ずら！なんか自分で言ってるだけじゃあ、そのあといつも通りご飯を食べて支度をして家をでて今は学校……

「あ、花丸ちゃんおはよう」

「おはようずら丸」

いつも通り2人はマルに挨拶してくれた。当たり前前って思うかもしれないけどこの何気ないことがマルは好きずら！

「おはようルビィちゃん、善子ちゃん」

「善子言うな！ヨ・ハ・ネ！」

「わかつたずら善子ちゃん」

「だからヨハネだつてば！」

「今日も平常運転だね！」

「ルビィってこんなこと言うキャラだっけ？」

「一応小説の中じゃなんでもありだから問題ないずら」

「どういうことよ!?!」

そんな話をしてしていると担任の先生がきてHRが始まった。

そのあとはずぐに授業が始まり今は昼休み……

「「いただきます！」」

「うくん！今日も美味しいずら!!」

「「……」」

「どうしたの二人とも？」

「ずら丸アンタ最近太ってきてない？」

「えっ?」

「うん、ルビィもそう思う」

「……」

「ずら丸何黙ってるのよ?」

放課後……

「ということからダイエットよずら丸！」

「な、なんか大変なことになってるねマルちゃん」

千歌ちゃんは苦笑いしながら言う

「ぶつぶー！ですわ！アイドルたるもの体重管理は……」

ダイヤさんは絶対こうだとおもったずら。

「まあまあ、あんまり無理しちやダメだよ？」

「頑張つてね！」

果南ちゃんと曜ちゃんはもう神にしか見えないずら！

ここからマルのダイエットが始まった……

まずは朝起きてからある程度用意を済ましたら走りに行つてそこから家に帰つて学校へ昼ご飯は量を抑えたりしたずら。放課後はAoursの練習が終わつた後家に帰つてからまた走るずら。これを毎日最近やつてるずら！

それを終わらせて今は学校の宿題をやつてるずら！

けど……

「うーん、ここだけがわかんないずら……」

今やっているのは国語。この部分だけがどうしても出来ないずら。

うーん、はちくん聞いてみるずら！

「あ、もしもはちくんずら？」

そういえば電話をかけるの久しぶりずら！

「もしもし……」

その声は何故かいつもより暗くそして悲しそうな声をしていた。マルはただただはちくんの声に驚きを隠せないでいた
……………

続く

10話

「ごめん。今は1人にしてくれ……」

「えっ？あつ、はちく……」

プープーと電話が切れる音がする。

マルはただただ呆然としているしかなかった。

あそこまで暗くなつたはちくんの声を聞くのは初めてでどうしたらしいのか分からなかった。

はちくん………



花丸からの電話を切つたあと少し後悔した。

もう少し丁寧になつて断れなかつたのかと。毎度自分の不器用さには呆れてしまう。後で花丸に謝っておこう。

「はあ……」

今は修学旅行で告白の手伝いをしたところだった。そこで俺は嘘の告白をした。嘘の告白をした俺はそのあと雪ノ下たちに止められそうになつたが俺の顔を見て少し驚いていた。葉山たちもだった。今は細い路地に俺1人だ。ずっと泣いていたみたいだ。花丸に本来言わなければいけない言葉なのに……

花丸？なんであいつのこと思い浮かべてるんだ？

そっか俺は………花丸が大好きなんだ。

それからどれくらいたつただろうか。

携帯から着信があつたことに気づく。相手は平塚先生だった。メッセージアプリをひらくと『いつ帰ってきててもいいぞ。私はいつでも君のことを待ってる。』

この時は素直に思った………ありがとうございますって。

ホテルにもどると平塚先生がやはり待っていてくれた。

「おかえり」

平塚先生はそう言っただけで俺の頭をわしやわしやと撫でた。そのあとはこれと言っただけ何も言わないでくれた。

戸塚には遅くなったこと謝っておけよと言われたぐらいだった。

「あつ！八幡！」

「おう、遅くなってすまねえ戸塚」

「もう！早く晩御飯食べに行くよ！」

「おう、ありがとな」

今は帰りの新幹線の中だ。

しかし昨日あまり寝れてないせいかなかなり眠たかったので、寝さしてもらったことにした。

夢の中では真つ暗な空間に花丸がいた。

俺が追いかけても離れていく。その差を縮められなかった次第には見えないぐらいに遠ざかっていく。

ああ、ダメだ。行かないでくれ頼むから！

「っ!？」

ここで目が覚めた。

ほんと俺どうしちゃったんだよ……

「八幡大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

いや、内心は全然大丈夫じゃない。

もう今は花丸のことを考えるのはやめよ。

そうして窓の向こうの景色を眺めていた……



「ど、どうしよう……」

マルなにか悪いことしちゃったのかな？

もうマルの心の中は少しパニック状態だったずら。

その時、LINEがきたずら。もちろんはちくんから。

『さつきはすまん。けっこうドタバタしててな』

なんだ、そんな事だったら別に大丈夫ずらね

よかった。嫌われちゃったかとおもったずら。

『うんうん、こつちこそ忙しい時に連絡してごめんずら』

そう返信しマルは安心してお布団に入りました。

まだこの時は何も分からなかった。はちくんの身に起こったこと、

過去のことそれがはちくんの心を傷つけていたことに……

続く

11話

修学旅行から帰ってきてからまた普通の日常に戻る。

すなわち奉仕部があるわけだ。今はあいつらといるのが少し辛かった。あそこにいったら絶対にあのことを思い出してしまう。自分でも分かっている。今の俺はなにもかもから逃げてるって。

それから奉仕部に行かず1週間過ぎていた……

「お兄ちゃん……」

「なんだ？」

「なんかあったの？」

さすがは我が妹だ。いや、俺が顔にだしているからか。

「べつに……」

「絶対ウソだよね？」

「……」

「結衣先輩たちから聞いたよ。あれはお兄ちゃんは悪くないよ！」

「……」

「だからさ、奉仕部に戻ってあげてよ！」

「そういう問題じゃないんだ」

「じゃあ、どういう問題なの？」

「お前には……」

「？」

「お前には関係ない」

「関係あるよ！奉仕部にはお兄ちゃんが必要なの！」

「奉仕部なんて知らない」

「っ！お兄ちゃん！」

その時パァン！と頬を叩かれた。

「お兄ちゃん……最低だよ！」

「……」

そのあとは小町といえるのも居心地が悪くなり外にでていた。どう考えたって俺が悪い。でも、今の俺に奉仕部へもどる資格なんてもんじゃないんだ。勝手に家を出たもんだから電話がすぐ掛かってくる。

とはいえぼつちだからほんの数名からではあるが、

「このままどつか遠くに行きてえな……」

ついついでてしまう言葉。

「誰もいないところで誰にも邪魔されずただのんびり寝ていられる場所とかないかな」

真つ先に思いついたのは天国だろう。

でも、俺は死にたくないしなんせ天国なんてもんはないと思ってるからな。やっぱ千葉？いや、なんか違う。

……沼津だなやっぱ。

「よし行くか……」

まだ月曜が終わり火曜日になったばかりの深夜。

家に戻らず1人千葉駅へ向かう。幸いスカラシップで得たお金があり何とか行けそうだ。ただただ行きたかった。理由は特になかった。

朝方になりようやく電車に乗る。

電車にゆられながら思い出す。学校休むって言わなきゃなど。

まあ、沼津着いてからでもいいだろう。

そして沼津に着いた。早速平塚先生に電話をかけた。

「あ、もしもし比企谷です」

「比企谷！お前今までどこに……」

「すみませんしばらくそつちには帰らないのでよろしくお願いします」

「あ、おい！」

要件を言っつてすぐに通話をやめた。その時の携帯の着信履歴は小町やら由比ヶ浜やら雪ノ下やらで埋めつくされていた。小町にも言っとかないとな。

「もしもし」

「お兄ちゃん！どこにいるの？」

「自分そっちには帰らないから」

「お兄ちゃん!」

これでよしと。

でも、やっていて心が傷まないわけがない。

だからなのかマツ缶が全然美味しく感じない……

「はあー」

大きいため息をついた。来たのはいいけど行くところないんだよな。とりあえず海行くか。

そのあとバスに乗り海のほうまで来た。

よく海を見ると自分の悩みなんかちっぽけに見えてくるという人がいるが俺にはそう思えなかった。なんせ捻くれてるからな。いや、関係ないか。風は相変わらず気持ちいい。なんか眠たいな……

「……うん?」

俺としたことが浜辺で寝てしまうとは!どこの主人公だよ!そして気がついた!

「泊まる場所探すのわすれてたああああ!」

なんとという失態!マジでどうする?!

こんなことしていると学生らしき人が数人歩いていた。

「そっか、今日学校普通にあるもんな」

みんなが学校ある日に休むってなんか変な優越感を感じるよな。あと、ちよつとした罪悪感もあるけど。

「てか、あの人たちどっから見たような……」

「!？」

「(んっ?なんかあの子こっちに来てるような……)」

「はちくん!」

「ひ、ひと違いだとおもいましゅよ!」

「思いつきりかんでるぞら……」

「どうしたのマルちゃん？」

あ、この人えつと高なんとかだったような……

「高海千歌だよ！」

「お、おう」

何この子エスパー？

最近の子は他人の考えてることわ分かっちゃうフレンズなんだね！

「うん？どうしたのマル？」

「あ、果南ちゃん」

おいおいなんかぞくぞく集まってきたぞ。めっちゃ気まづいわ！

そのあとA q o u r s？だっけか、自己紹介をすまして今は花丸と公園へ。

「話は小町ちゃんから聞いたずら」

「……」

「別に何があったとかは言わないで言いずら」

「すまん」

「はちくんはいつも抱えすぎずら」

「……」

「ともかく今日はマルの家に泊まるずら！」

「え、それは……」

「大丈夫ずら！」

半ば強引に連れていかれ久々に花丸の両親にも会った。

昔みたいに変わらずいい親御さんだよな。小町にはすでに連絡しておいてくれたらしい。

で、今から寝るわけなんだが……

「なあ、一緒に寝はまずいだろ」

「どこがずら？」

いやいや俺一応男だよ？なんなの？なんでそんな平然としてられるの？

「はちくんだからずら」

「それは理由になってねえよ」

「この前泊まりに行った時は一緒に寝てくれたぞら！」

「あー、もうわかったよ」

「さすがはちくんぞら♪」

なんかいいように操られてるような……

寝る前にちよつと散歩しようって花丸が言ったので行くことにした。

「ねえねえはちくん」

「どうした？」

今は昔よく花丸と遊んでいた公園のベンチに2人して座っている。

「泣いていいぞらよ」

「は？」

「はちくんずっと悲しい顔してた」

全然気づかんかったぞ。

俺そんな顔してたのかよ……

「はちくん」

「すまん」

俺は気づいたら泣いていた。まったく俺らしくないな。

花丸は俺を優しく抱きしめてきた。

「はちくんは頑張りすぎぞら。もっと甘えたほうがいいよ」

「花丸？」

昔からそうぞら。マルがいじめられてたら助けてくれた。自分が次にいじめられるのわかってるのに……

花丸も泣いていた。なんて最低なんだろうか俺は。

こんなにも俺のことを思ってくれて泣いてくれる子がいるのに俺は……

「花丸」

「？」

「俺の話聞いてくれないか？」

「いいの？」

「花丸に聞いてほしい」

「いいずらよ」

そのあとは花丸と離れてからのことそして修学旅行のことを全て話した。

「ほんとにはちくんは大バカずら」

「そうか？」

「そうずら。いつも心配ばかりかけてほんとに大バカずらよ。」

「そうかもな」

ほんとに花丸には助けられてばかりだな、

「ありがとな」

「？」

「俺の話聞いてくれて。楽になったよ」

「それぐらいいつでも聞いてあげるずら♪」

俺は確信した。花丸はやっぱ俺の中では特別な存在だって。だから決心した。

「な、なあ花丸」

「どうしたずら？」

「もうひとつ聞いてほしいことがあるんだ」

「？」

「俺は花丸が好きだ。もちろん1人の女の子として。上手く言葉に表せないぐらい好きだ。だから……付き合ってくれないか？」

俺の告白は色々ぐちゃぐちゃしたものだが花丸が好きだという思いはわかってきていると思う。断られてもいい。そんなんで崩れるほど俺と花丸の関係は弱くない。

「……」

「？」

「そ、そのこちらこそよろしくお願いします／＼／＼」

「そうだよな断るに決まってるよな……ええええ!？」

「マルは昔からはちくんのこと男の子として好きだったずら♪」

「そうか……、待たせてすまねえ」

「ほんとに大バカずら♪」

「そうだな！」

「あははははー!」

お互い笑いあった。この時思い出したこの公園での約束を……

幼少期……

「きめたずらー!」

「どうした?」

「オラしようらいははちくんのおよめさんになるずらー!」

「はあ!?／＼／＼」

「だからこくはくはこのこうえんでしてね!」

回想終了……

「そっかこの公園で約束したもんな」

「告白のことずらか?」

「ああ」

「今思いかえすと恥ずかしいずら／＼」

「花丸」

「?」

「これからも、いやこれからずっとよろしくな」

「うん!よろしくお願ひしますずらー!」

そしてお互いの唇を重ねた。

俺は花丸と恋人になった。花丸を守っていこうと決心した何があっても。

俺は今のままじゃダメだ。だから俺は変わらなくちやならない
……………

続く

12話

俺は朝早く起きた。まだ日が出てくるかどうかという辺りにだ。さすがに朝飯までご馳走になる訳にはいかない。部屋から出ようと思った時グツと服の袖を掴んできた感触があった。

「もう……行くの?」

少し寝ぼけてはいるが寂しそうに言う。

俺も寂しいがここは仕方がない。

「ああ、ありがとうな」

「ふえ?」

おいおい可愛いなそれ

「俺のことで泣いてくれたり話を聞いてくれたり嬉しかった。だから本当にありがとう。」

我ながらかたすぎる言葉ではあるがそれぐらい感謝があった。

「それぐらい当たり前ずら!」

「!?」

「その……はちくんの彼女だから……//」

さつきから可愛すぎやしないか俺の彼女

「ありがとう」

そう言って俺は花丸に抱きついた。

「ずらっ!?!//」

しばらくずつとこのままでいた

不思議と安心する感覚があった

「じゃあ行ってくる」

「がんばってねはちくん!」

「おう」

俺は胸を張って花丸の家から出た……



「やっぱり今日も来ないのかなヒツキー……」

「八幡どうしたんだろう？」

あの修学旅行以来ヒツキーはずっと奉仕部に来ないままで今日に至っては朝のホームルームには来てなくて平塚先生は休みつて言った。

「（私のせいだよ。私何も考えてあげれなかった……）」

あの後何があったのか聞いた。元々ヒツキーは意味もなくあんなことする人じゃないと分かってたのにあんな態度とつちやうなんて最低だよ。ゆきのんもかなり気にしてた。

ガラガラ！

かなり大きくドアを引く音がした。

「遅れてすいません！」

ヒツキーだった。今は1時間目の授業中だった

でも、彼の顔は前までの暗い表情じゃなくなっていた。むしろ今は楽しそうにしている感じだった。



俺はとりあえず休み時間に由比ヶ浜に放課後話があると聞いていた。前までならそんなことせずに避けてたかもしれないが今回は違ったみたいだ。花丸のおかげかも……

「ふう……なんか緊張するな」

今は部室のドアの前이었다。

ずっとこのままではいけないそう思いドアを開けた

「うっす」

「久しぶりね」

「待ってたよヒツキー」

「遅いですよー」

なんで一色がいるの？という疑問はあえて言わないことにした。た。

「それで話とは何かしら？」

「修学旅行の事だ」

「……」

3人とも黙り込んだ。一色も知ってるぽいな。こいつらは何も悪くはない。悪いのはカツコつけて相談せずに身勝手に犠牲を選んだ俺が悪いだから――

「すまなかつた」

「?!」

「俺が勝手にとった行動でお前らを困らしちまった本当にごめん。」

「私のほうこそごめんねヒツキー」

「私もあなたに頼りきってしまったわ……本当にごめんなさい」

「俺はこんなんだけどこの奉仕部にいていいのか?」

「捻くれてるし目は腐ってるしネガティブだし……」

「おいおい雪ノ下さん俺のことdisってませんか?」

「でも、」

「?」

「あなたはこの奉仕部に必要な部員よ。」

「そっか、ありがとなみんな」

「二おかえりなさい!」

3人ともそう言ってくれた。俺はただただ嬉しかった。

こんな俺を受け入れてくれて本当に感謝しかない。

「ただいま」

「仲直りもしたことですし帰りにどっかよっていきますか?」

「いいねいろはちゃん!ゆきのん大丈夫?」

「ええ」

「俺も大丈夫だぞ」

「どこ行きますか?」

「サイゼ!」

「……」

「えっ、何この空気?」

「こういうことろ直して欲しいですね」

「そうだね」

「そうね」

「サイゼンこそ正義！」

なんだかんだこの奉仕部が大好きなんだと思う。
後で花丸にお礼言つとかないとな……

続く

13話

結局安定のサイズで雑談をしたあと家に帰ってすぐに花丸に電話した

「もしもし俺だけど」

「どうしたのはちくん？」

「ありがとな」

「へ？／＼／」

「花丸のおかげで仲直り出来たよ」

「マルはただ助言をしたままですら」

「それでもありがとな」

「な、なんだか今日のはちくんは素直すらね!？」

「花丸の前でぐらいだけどな」

「なんだか恥ずかしいすら／＼／」

「こんな他わいもない会話をする

よく小説とかみてると話をするだけで楽しいということがよく書かれていますが本当にその通りだと思う

「あとな……」

「？」



さて今日は沼津で花丸とデートの日だ

服がジャージとかパーカーしかなかったから柄ではないが急いでオシャンティーな服買いに行ったわ!

「はちくん」

「うっす」

今更だがこうやって花丸とデートするの初めてじゃね？

なんか緊張してきたぞ!

「はちくん緊張してる?」

「!？」

「そういうところかわいいぞら♪」

「なんか踊らされてるみたいなんだが……」

「気にしないほうがいいぞらよ?」

「へいへい」

なんか最近花丸に大概言いくるめられてる気がすごいするんだが

……

「んじゃ行くか!」

「ずら!」

「ほら」

そう言つて手を差し出した

「ずら／＼／＼」

いまだに手をつなぐことには慣れていないがお互いの温もりが感じられていいなつて最近思う。

なんかキャラ変わつてるくね?……

「着いたずら／＼!」

俺たちはショッピングモールに来ていた。戸塚に相談してみたんだが初めてのデートだからここは無難にショッピングモールのほうがいいということに決定した。

「とりあえずぶらぶらしながら気になった店見ていこうぜ」

「ずらつ」

返事する時に「ずらつ」て言うのあざといな……

「このピンクの腕時計かわいいぞら／＼」

花丸が見ていた腕時計はピンクといえども落ち着いた薄いピンクの腕時計だった

「花丸つてこういうの好きだっけ?」

純粹に聞いてみた

「もうっ、オラだつて女の子だから当たり前ぞら!」

「あー、すまん」

「ふーんだ」

ほっぺたを膨らまして怒ってるの可愛いな……つてなんてこと考

えてんだ俺は

「ただな……」

「？」

「今まで本にばっかりしか興味なかった花丸がこうやってほかの事にも興味を持つてくれたことに驚いたよ」

「Aqoursのおかげすら！」

「だな」

あらためてAqoursが花丸の中で大きい存在だということ認識させてくれた。

「あと、はちくんのおかげ……すら／＼／＼」

いやー、そんな顔真っ赤にして言わないでくださいよ。

こつちも恥ずかしくなつてきちやつたじゃねえか！

「お、おう」

ほんとに毎回ドキドキさせやがるな俺の彼女は

続く

14話

「な、なあ花丸さんよ」

「ん？どうしたずら？」

「誠に言い難いんだけどさ」

「？」

「食べ過ぎじゃないですかね？」

「だって美味しいから仕方ないずら」

「あ、はい。」

今は一通り買い物を終えて昼ご飯の時間になったのでバイキングにしようとなって今食べているんだが……

この子バケモンかよ。でもあんなだけ食って全然太らないよな。むしろその分あそこについているような……

「はちくん食べないずらか？」

「あ、食べりゆぞ」

「なんでそんな噛み方したずらか？」

本当に恥ずかしいかぎりでございます。

「これも！これも美味しいずら〜♪」

「マジ天使」

なんだよ食べてるだけでかわいいって反則ですな

「食べたらどっか行きたいところとかあるか？」

「う〜ん、服を見に行きたいずら！」

「わかった」

にしても花丸がすすんで服を見たいと言うとは八幡嬉しいぞ！

昼ご飯を食べ終えて今は服屋に来ているんだが……

「ねえねえ、はちくん」

「ん、どうした？」

「その、できれば同じ服買わないずらか？／／／」

ん、この子何を言ってるのかな？

つまりペアアルックってことですか？

「ペアルックってことか?／＼／＼」

「そうずら／＼／」

「で、でもなく」

「恥ずかしさのあまり言葉を濁そうとした時

「ダメずらか?」

涙目に上目遣いという最強のコンボがきたために何とも断りきれず……

「どれがいいんだ?」

「はい。やっちまいました。

「これとかどうずらか?」

はなまるが取ったのは黄色のパーカーと黒のパーカーだった。デザインはもちろん同じだが色は自分の合う色がいいということになりこれにした。

「これでオラもはちくんとペアルックずらく♪」

「なんならもう着てみるか?」

「いいの?」

「おう」

というわけできっそく買ったばかりのパーカーを2人して着たわけだが、花丸のニヤケが全然止まらない。

「花丸さすがにニヤケすぎだろ」

「えっ!? マルそんなにニヤケてたずらか!」

あ、気づいてなかったんだ

「じゃあそろそろ帰るか」

「うん……」

元気ないな……そんなに寂しい顔しなくても

「なあ花丸」

「どうしたの?」

「またいつでも会えるんだからそんなに悲しい顔すんなよ」

「っ!」

「そりゃ静岡と千葉じゃ距離はあるけど俺たち恋人同士だろ?」

「そうずらね」

「ほら」

俺は花丸の小さくて柔らかい手を握った。

俺にしてはなかなか大胆だろ？ そうだろ？ すごいだろ？

「ねえねえはちくん！」

「どうし——ん!？」

「えへへ／＼／＼キスしちゃったずら／＼／＼」

可愛いやつめ

「はちくん? ——ん!？」

「仕返しだ／＼／＼」

「ずらあく／＼／＼」

まだまだ花丸との物語は続きそうだ。

というか永遠に続いてほしい。こんな日がいつまでも続きますようにと俺は切に願った

続く

15話

「なんだこれ？」

小町がポストの中を見て来いと言ったものなので見に来たはいいが住所が書かれていなく比企谷八幡様へとしか書かれていなかった。これは直接入れたんだろう。

「お兄ちゃんなんかあった？」

「いや、なかったぞ」

「そっかー、ありがとね！小町的にポイント高いよ！」

「へいへい」

なんか変な予感がしたんだ。だから小町に嘘をついた。

「なんだよこれ……」

内容は衝撃的だった。なんでいつもこうなるんだろうか？なんで俺はこんなに不幸なんだろうかそう思った瞬間だった。

■ ■ ■

「すいません平塚先生遅れました」

「次からは注意するんだぞ比企谷」

「はい……」

結局あのことが気になって仕方がない……授業にも集中出来ない。

「なあ、由比ヶ浜」

「どうしたのヒツキー？」

「今日ちよっと部活休みみたいんだが雪ノ下に言っといってくれないか？」

「うん！わかったよ！」

「すまん」

流星に正常でいられなかったんだと思う。

我ながらいつもこういう時は落ち着けと何度も思っていたのにな。

「ヒツキー大丈夫？」

「あ、ああ大丈夫だ。問題ない」

なんか今自分が言ったセリフ誰かの真似たよね！

最近自然と真似ちやうんだよな☆

家に帰る途中いつもなら寄らない公園に寄った。

マツ缶を買ってベンチに腰掛けている。

「あれが本当ならまずいな……」

考えたくもないことを考えてしまう自分をマツ缶を飲んで考えないようにする。けど、逃げてはいけない。

これは俺だけの問題じゃないからな。そして俺は決心して携帯電話を取り出した……

■ ■ ■
あれからマルたちAqoursは色々なことがあった。

廃校になるかもしれないとなったり、6人の意見がまったく合わなかったり、予選と学校説明会が一緒の日だったけど何とか出来たり、まったく忙しいことばかりだけどAqoursはとても充実していたと思う。ラブライブの決勝大会にも進むことができて今はラブライブに向けた練習をしていた。

「ふうー、疲れたずらく」

「そうだね花丸ちゃん……」

「ふふふつ、この堕天使にはって言いたいところだけれど流石に疲れたわね」

流石の善子ちゃんも堕天使ネタが言えないぐらい疲れてたみたい
ずらね

「ネタ言うな!」

「なっ!?地の文を読むのはプライバシーの侵害ずら!」

「うるさい!ネタって言うのが悪いの!」

「勝手に読むほうがわるいずら!」

「花丸ちゃんと善子ちゃん……」

「だからヨハネだつてば!……」

「仲直りしようね (ニコツ)」

「あっ、はい。」

最近のルビィちゃんは恐ろしいずら……

「最近のルビィちゃんなんかこわくない？」

「ヨ、ヨーソロー」

「曜ちゃんはそれ言いたいだけでしょ！」

「(ようちか最高だわ)」

梨子ちゃんが明らかにまずい方向に行ってるのは無視しておいた方がいい……よね？

「あれ？そういえば3年生たちは？」

「3年生たちは生徒会の仕事してくるって言ってたわよ。もしかして聞いてなかったの千歌ちゃん？」

「あはは、面目ないです……」

「あっ！もう最終下校の時間だ！」

「曜ちゃんナイスウ！よし！みんな早く着替えるよ！」

「千歌ちゃん何そのナイス……」

何とか間にあって今はバスの中、残ってるのはマルだけ。この静けさも好きだけどA q o u r sのみんなという時の騒がしさも最近好きになってきたずら

バスから降りるといつもより空は暗くてなんか不吉な予感がしたんだ。でもマルはその時その思いを隅において帰宅した。

「あれ？はちくんから電話きてたずら！」

なかなか会えなくても毎日電話は欠かさずやってくれるあたりはちくんは本当にやさしいずら／／／

「マルちゃーん、はちくんから電話きてるよー」

「わかったずら／」

「もしもし？」

「もしもし、花丸」

「？」

何となくおかしかったんだ。声のトーンからしてはちくんはまた自分で何とかしようと思ってるんだってでも、次の一言でマルはそんなこと考えられなくなった……

「……別れよう」

「えっ？……」

一言だけなのにこんなに長くて重いつた言葉はなかったんだ。

「なんで……なの？」

「ごめん……」

はちくんは理由を言わずに誤って電話を切った。

マルは何もかもが考えられなくなつて気づいたら外にでて走つてたんだ。信じたくなかつたんだと思う。

マルはずつと泣いて泣いて泣いて……

「はちくん……」

マルからいなくならないでよ……はちくん

続く

16話

マルはもう何がなんだか分からなかった

「別れよう……」

その一言を聞いただけで気が狂いそうだった

「なんで……?」

泣きそうになったけど抑えて何とか聞いてみた

「付き合うのが嫌になったから」

即座にそう答える彼。知ってる。あなたはまた何かからマルを守

ろうとしてるんだよね? さっきまで気が狂いそうだったけどこの一

言で何となくそう確信した。

「また1人で抱え込むの?」

「……」

「何か言っつてよ!」

「俺は……俺は」

「ハッキリ言っつてよ!」

あ、やつちやった……はちくんが何となく嘘ついてるの分かってる

のにマルはいつも……

「ごめん……」

この一言だけ言っつてはちくんは電話を切った。

残ったのははちくんと別れたという事実。

あれから数日後……

「ねえねえ善子ちゃん」

「ヨハネよ」

「花丸ちゃんなんか……」

「うん、何となく分かるわ」

「……」

「ズラ丸!」

「!?どうしたの善子ちゃん?」

「どうしたもこうしたもないじゃない!最近授業中は上の空だし、練習の時もいつもフラフラでどうしたのよ?」

「そ、そんなことない……」

「花丸ちゃん!」

「ルビイちゃん?」

「いつも1人で抱え込むのはやめよ?・ね?」

ちがう。1人で抱え込んでいるのはマルだけじゃない。

はちくんもなのに!

「抱え……込んで　ないよ?」

「っ!ズラ丸いい加減に……!」

わかんないよ。なんか自分が壊れているのが分かってる。いや、自分で壊してるんだ。でも昔からはちくんはこれを毎日のように体感してたんだ。それを思うとマルはほんとにちっぽけだね。

パァン!

乾いた音が3人しかいない教室に響いた

「花丸!」

たぶんこんなこと考えてる間に善子ちゃんがマルの頬をぶったんだろうな。

「花丸しつかりしなさいよ!」

「っ!」

「アンタが抱え込むところ、いつも1人でどうにかしようとするところが私は嫌いなよ!だからしつかりしなさいよ!!」

分かってるよ!マルだって分かってるよそんなことぐらい!

「善子ちゃんなんかに分かるわけないよ!!」

「!?!」

「知ったような言い方ばっかり言ってこれっぽっちもマルのことわかってないよ!!」

マルはそれだけ言うと教室から出ていった。何となくあの場から離れたかったんだと思う。その時ふと2人の顔を見たけど驚いてい

た。自分でも思った。ここまでハッキリ自分のことを言ったこともなかったし、ましてや怒鳴ったりしたことともなかったから。どこでマルの歯車は狂っちゃったのかな……

■ ■ ■
ここは浦の星女学院スクールアイドル部の部室

いつもなら活気あるれる場所なのだが今はその反対で空気がとても重かった。そして尚且つ今は9人ではなく8人だった。

「やっぱり今日も来なかったね花丸ちゃん……」

まず口を開いたのはリーダーである高海千歌だった。

「何があっただんだろうか？」

「わからないわ」

渡辺曜、桜内梨子は千歌の言葉につづいて言った。

「花丸さんと昨日お話をしたんでしたわよね？」

「そういえばそうだったわね！」

「で、どうだったの？」

黒澤ダイヤ、小原鞠莉、松浦果南は1人不在の1年生組に聞いた。

「それが……」

「怒らせちゃったみたいで……」

2人とも不安な口調で言った。

「えっ？マルちゃんが？」

「うゆっ」

Aqoursの中でも全く怒ったことのない少女国木田花丸。性格も大人しくておっとりしている。しかし彼女は昨日怒った。しかも怒鳴り声に近い声で。善子、ルビィ以外のAqoursのメンバーにはそれは信じ難いものだった。

彼女に一体何があってあんな風に怒鳴るまでにさせてしまったのだろうか。原因はわからない。しかし間違いないと言えることは、このままでは国木田花丸という少女が危ない状況だとは確信している。だから何とかしたい。しかし手段がない。そんな時だった……

プルルルルルッ

沈黙の空間で携帯が鳴る

「あ、私だわ」

善子の携帯だったようだ

相手は善子の母

「ちよつとごめんなさいね……」

申し訳なさそうに部屋を出て行く。

「ほんとに花丸ちゃんどうしちゃったのかな……」

千歌の言葉は当たり前ではあったが、今のこの状況で余計に全員が不安にかられた。神様何とかしてくださいとみんなが願った。

「みんな!!」

「花丸が——」

「行方不明だって!」

全員の不安は運悪く、すぐに当たってしまったようだ。

——神様なんて嫌いだ——

誰もがそう思っ

た瞬間だった。

17話

あれれ？ここ何処だっけ？さっきまで学校から帰ろうと思ってバスに乗ってたはずなのに、ここは……

あつ——

1時間前、…

やっぱり今日も部活には行かないでおこうかな。

すごい迷惑かけてると思うけど善子ちゃんやルビィちゃんにあんな酷いことを言っちゃたし……というかマルなんかみんなの迷惑になるほどの人じゃないよね……

毎日あの時の記憶がすっかり思い出されるから毎日泣いてるような気がする。はちくんの彼女になれて嬉しかったし、もつとはちくんにマルのこと見てもらおうと思って今までしたことがない化粧を試してみたり、落ち着いた服ばかりだったからかわいい服を着たり………

確かに最高の日々だった。でも、納得いかない！マルはもつともつとはちくんという、一緒にでけたり、一緒に遊んだりただ単純な事だけれどもつとしたい！その気持ちを伝えきれずに後悔して関係の無い子達に八つ当たりしてもうマルはどうしたらいいか分からないよ！

「はあ、こんな事ばかり考えちゃうずら……帰ろ」

それでマルはバスに乗り込んだ

マルが降りる頃にはマルしかいなくて寂しかったかな？

その時——

「うっ!？」

急に電流が流れたように感じた。一瞬の出来事だったのでマルはそのまま意識が亡くなった……

現在、…

「マルはあの時だれかに……」

思い出しながらよく見るとマルの手と足がしっかりと紐で固定されていた。

「あつ、花丸ちゃんやつと起きたんだね！」

「あなた……は？」

「だ、だれすら ですか？」

「えっ、本当に覚えてないの？ 僕のことを覚えてないの嘘でしょ？ ウソだよね？ ね？」

この人何か気に触ることしたらダメなやつすらね

「そっか残念だなー。 あつ、そういえばさー花丸ちゃんの大切な人いるんだけど会ってみる？」

「えっ？」

ど、どういふことすら!? はちくんがいる？

「よつと、はい、君の大切な人」

「え？」

そこで見たのはボロボロで全身にあざや血がついて傷ついていたはちくんだった——

「な、なんで？ はちくん、はちくん返事するぞら！ はちくん！」

「今は意識を失っているだけだから大丈夫だよ。 ま、そのうち殺さないとだけどね（ニコツ）」

「えっ？ どういふことすらか？」

この人が何を言っているのか分からなかった。 言っていることは分かっているけど信じたくない！ そう思ったぞら

「この男花丸ちゃんと仲良さそうだったからさー、花丸ちゃんと別れろって手紙で送ったんだけど、聞かなかつたから花丸ちゃんに何かあつても知らないよつて送ったら、花丸には手を出さないで欲しいって言うからその条件として花丸ちゃんと別れてほしいって言ったんだよ。 でも、僕はそんなの嘘だし花丸ちゃんに危害を加えようとしたんだけどコイツに邪魔されたもんだからこうなつたんだよ。」

この人異常ぞら。 マルにはそんな考えだけが浮かんだ

「なんでこんなことするぞら！」

「何でつて、花丸ちゃんと一緒になるためだよ？」

「そんなのマルは望んでないぞら！」

「君が望んでなくても僕はそう望んでいるんだよ！」
パチン!!

あまりのことに状況が把握出来なかったがすぐにわかった頬を叩かれたんだ。

「ああっ」

「ごめんね花丸ちゃん……でも君と僕がひとつになるには仕方がないんだよ。」

「本当にやめるぞら!!」

知らない人にそれもはちくんを傷付けた手でマルの体に触れようとしている

「なんで逃げようとするの?」

手足は言うことを聞かないので自分で地面を滑るように動くけど歩く人には勝てず。その男はまたマルに近づこうとする

「来ないで!」

「大丈夫。そのうち気持ちよくなるよ。花丸ちゃんって処女かな? やっぱり処女だよな? 最初は痛いかもだけどゆっくりやれば大丈夫だよ。」

何を言ってるの? やめて! マルはこんな嫌だ! 助けて! 助けてよはちくん!

「いい下着だね。」

知らない人に下着を見られた。やっぱり本当にこのままじゃ……でも、手と足はしっかりと紐で固定されていて動かない! どうすれば……

「じゃ、そろそろ見せて」

「いや、いやいやいやいや!」

そう言っつて男がマルのスカートをめくろうとした時――

「俺の花丸に何してんだ」

彼はそう言っつと男の体にスタンガンをうちつけた。

「ああっ!」

男をもがきながら意識を失った。

「花丸……」

久しぶりに見る彼はボロボロで何故かすぐに抱きしめたくなくなった
「はちくん！」

マルは精一杯はちくんに抱きついた

「ごめんな花丸……辛いことばかり」

「許さないぞらよ」

「えっ？」

「マルを幸せにしてくれたら許すぞら」

「花丸……善処する」

「本当ずらか〜？」

「ああ絶対だ」

マルはそんなはちくんが可愛らしく思えてきて――

チュツ

はちくんにキスした。マル自身も驚いてる。まさかマルからやって
てしまうとは／＼／＼

「は、花丸さん!?!?!」

「あ、ま、マル今……恥しいぞらあ〜!!」

「なんでお前が驚いてんだよ!?!」

もちろんはちくんの1人で抱え込む性格はマルは好きじゃないけど、
マルのことを思ってくれてるのは伝わってくる。だから今度ははちく
んの隣にずっとマルがいるから

「あつ、警察呼ばないとな」

「そうだったぞらね」

「花丸電話かけてくれないか?」

「マル、スマホ持ってないぞら……」

「こいつどうすんだよ……」

この後近くに来た警察官に事情を説明して何とかかなりましたとき

18話

「えへへっ、はちくくん」

「……」

ただいま事情聴取のためにパトカーに乗って移動しているのだが、花丸が眠たいと言うので寝かせてあげたらものの1分で爆睡。そして寝言が聞いている側からしたらくそ恥ずかしい。警官の人も苦笑い。この状況をどうにかしたい、いや、無理だな。

「彼氏さん大変ですね(笑)」

「あはは、そうっすね」

アంతタに俺の何がわかるってんだよ！

そんなことを思っていると、また花丸の寝言が始まった。

「はちくん……どこにもいかないでえ……」

改めて俺は花丸に迷惑をかけてしまったなと思った。というか迷惑どころの話じゃないと思う。なのにすぐに許してくれるあたりガンダム正直嬉しかったが逆に変な勧誘とかに引つかからないかが心配になってきたわ。

「はちくくん、のっぽばん買ってずらく」

「やつぱり心配だ……」

あの後警察署に行き事情を説明して帰ってる最中。

一応その時に小町とかに連絡したし、花丸の両親にも連絡はとった。ただ今現在ここは沼津なわけで今回は花丸の家に泊まらせてもらうことにした。

「久しぶりにお泊まりずらー！」

「目覚めた時気がついたけどここ沼津なんだよな。」

「はちくんはなんであの時あんな所にいたの？」

「ま、それは花丸の家に着いてからにしよう」

「ずらっ！」

そんなこんなで花丸の家に着き花丸の両親にすいませんでしたって謝った。「マルちゃんを守ってくれてありがとね」なんて言われた。なんか恥ずかしくなっつてふと花丸を見ると何故か花丸も恥ずかしそ

うにしていた。

あんまりにも色々な事がありすぎて晩御飯は申し訳ないが断らせてもらった。それよりも疲れの方が勝った感じだな。

「はちくん」

「ん？」

場所は変わってここは花丸の部屋

そもそもお前ら恋人同士だったら同じ部屋で大丈夫だろ？って花丸のお父さんが言ったので今花丸の部屋にいる。ていうかお父さん俺のこと信用しすぎだろ……

「あの時の話聞きたいすら」

「ん？ああ、わかった」

——あの手紙が届いた日——

「花丸に近づくな？イタズラか？」

あの時俺は単なる花丸のファンのイタズラかと思ったんだ。（その時点でもヤバいけどな）

でも、次の日も来るもんだからどうしようかと思ってたら

「は？なんだよこれ？」

手紙には花丸を盗撮したと思わしき写真といつでも花丸ちゃんを僕のものに出来るんだよ？そうなりたくなかったら花丸ちゃんから離れろって書かれたものがあつた。

「それでマルから離れようとしたの？」

「……ああ」

「で、あいつにあつた時に鉄の棒で殴られて意識を失ってたらあの場所にいたんだ」

「……」

「ごめんな、辛い思いさせて」

「ううん、マルのほうこそあの時の電話の時に何か隠してるって分かってたのに何も言えなかつたすら。だからお互い様すら。」

「花丸……」

「これからはもっとデートしたいすら」

「わかった」

「いっぱい触れ合いたい」

「おう」

「いっぱい手を繋いで色んなところに行きたい」

「……」

「もつともつとはちくと色んなことがしたいすら」

彼女の言葉からは確かな本物を感じた。

「ああ、全部やろう。ずっとこれからも」

「うん！」

彼女は笑っている。

俺も笑ってる。

こんな笑い合える日が永遠に続くように俺と花丸はそう願いながら満月の輝く夜にお互いの唇を合わせた。

花丸はまた嬉しそうにしながらも少し顔が赤くなっている。そんな彼女が愛おしくて息をきらすまで花丸と接吻を交わした。

「はちくんは欲張りさんずらね」

「いや、花丸のほうが欲張りさんだ」

「なっ!?! そんなことないずらく!」

「そんなことあるんだよ」

「むうー」

どう考えたって花丸は欲張りさん

19話

あの日から数日がたち俺達は元の生活にもどった。
なんか異世界言つてた人みたいになってるが違うからね？

「八幡誰と話してるの？」

「と、戸塚あ!!なんでもないぞ!」

「そっかあー、じゃあお昼一緒に——」

「もちろんだ!」

あゝ、今日も戸塚は天使だ!

やっぱり男の娘最高!

「ん?花丸からか」

携帯のバイブ音がなつたのでスマホを見てみたんだが……

『はちくん、浮気はダメだよ?』

こゝ、こゝえー……

とりあえずなんか返しとくか

『大丈夫だ。俺はそんなことは絶対しない。』

「八幡はやくー」

「おう、今行くわ」

花丸に返信してからいつも通りのベストプレイスに戸塚と向かった……

〜そのころ浦の星女学院では〜

「あやしいぞら……」

「うう、花丸ちゃん怖いよ〜」

「黒いオーラが全身から出てるわね!」

今はルビイちゃんと善子ちゃんとお昼ごはんを食べてただけ
ど、何となく女の勘?ってやつがはたらいて何かを察知したのでは
くんに連絡したんだけど。

何か隠してるぞら。帰ってからみっちり問いただしてやるぞら!

「花丸ちゃんが急にニヤつき始めたよ……」

「もはや邪神ね！」

さつきから善子ちゃんがうるさいぞら

「そういうえげつなら丸最近どうなのよ！」

「ん？なんの事ずら？」

「とぼけても無駄よりア充！」

「なっ！／＼／＼」

そう、その後A q o u r sに今回あったことを謝った時に事件のこ
ととかも話したんだけどどうつかりとはちくんとの関係を言つてし
まったずら。そしたら色々と面倒くさくなつたずら。特に善子ちゃ
……

「ヨハネよ!!」

「地の文を読むのはやめるずら？」

「あつ、はい。」

「(なんかこの光景どこかで見たような……)」

「それにしても善子ちゃん。早くご飯食べないとチャイムなつちやう
よっ。」

「えっ？ああああ!!早く言いなさいよずら丸う！」

「アハハ……」

ルビイちゃんも流石に苦笑いずら

く場所は戻つて総武高校の屋上く

俺は今戸塚と二人つきりで、二人つきりで！(大事なことから2
回言いました。)昼飯を食べようと思つて屋上に向かつたんだが……

「なんでお前がいるんだよ」

「うむ？おー！これははちえもんではないか！」

「なんでその呼び方になつてるんだよ……」

「材木座こんにちは」

「おー！戸塚殿も一緒か！こんにちは！」

「だからなんでお前がなんだよ」

「やはりこない天気の時を外で食べたいとは思わないか？」

くこれあれだな

「教室でひとりで食べるのはきついからな」

「!?ちよっ!やめろおおお!!」

「うるさいから。あれっ?てか名前なんだっけ?」

「えっ、酷くない?ねえ?酷くない?」

「そんな事より早く食べようよー」

「そんな事!?我にとつてはそんな事では片付けられないんだけど!」

「そうだな戸塚!!」

「もうヤダ」

流石は戸塚!アイツの扱い方をよく知っている!

というか戸塚の弁当めちやくちや美味そうだな。

「あっ!そうだ!」

「ん?どした戸塚?」

「今日って八幡部活ないよね?」

「まあ、そうだが」

「材木座も暇だよね?というか暇でしょ?」

「おのー、戸塚殿?なんかキヤラ崩壊してません?」

「この3人で今日サイゼ行こうよ!」

「よし!今からでも行くか!!」

この頃の八幡は家に帰ってからまさか花丸から色々な事(戸塚)を
小1時間問い詰められるとはまだ知らなかった……

その時俺の携帯が鳴った

「すまん小町先に電話してくるわ」

「了解でありまーす」

わざわざ敬礼しながら言ってるやがる！あざとい！

「えつと、平塚先生か……」

なんか色々なことの愚痴を聞くだけになりそうなんだけど……

「もしもし比企谷です」

「もしもし平塚だ。すまんね夜遅くに。」

「なんか用すか？」

「実はだな……」

翌日

「「「「「えく!?」「」「」」」」」

「千葉でライブずら!?!」

「そうデース!」

今は部室で鞠莉ちゃんから話があると知られて集まっていた。

「未来ずらく!」

「ずら丸はいつも通りね!」

それはそうずら。千葉なんだから……千葉?

「ともかくみんな千葉でのライブは2週間後なんだからいつもよりみっちり練習するよー!」

「果南ちゃんきつくし過ぎないでね?」

「千歌ちゃん、がんばルビイだよ?」

「だつて〜」

千歌ちゃんはほんとに子どもみたいずら

でも、千葉でライブか。またはちくんと会えるずらあ〜／／／

「あれ?花丸ちゃん?なんかあつたの?」

千歌ちゃんがマルの顔を見て何かを察したようで、ニヤつきながら聞いてくる。ちよつとは反撃しなきゃだよな?

「実は千葉にはマルの大切な彼氏のはちくんがいるから、会えると思うととってもうれしくなったんだ／／／」

「『『『『…／＼』』』』』」

「そ、そうなんだー!?（なんか千歌まで恥ずかしくなってきたよ〜!）」
「（壁ドン、顎クイ……って何考えてるの私!／＼）」

梨子ちゃんは思考が分かりやすいぞら

21話

「ということだ！我々奉仕部は我が学校で行われるスクールアイドルのライブの運営の手伝いをする事が決定した！」

「えっ！スクールアイドルって今流行りのアレだよね?」

「由比ヶ浜さん少し落ち着きなさい」

「でも〜!」

「平塚先生、手伝うのは構わないんですが奉仕部だけでは足りない気が……」

「大丈夫だ！生徒会とボランティアで手伝ってくれる子があつまつたんでね」

「なら人数には問題なさそうですね」

「でもなんで来てくれるんだろ?」

「その事なんだが何でも学校の宣伝も兼ねてるらしくてな、全国とまでは行かないが周辺の地域や県でライブをおこなっているらしい」

「さっそく会議を始めるので会議室に集合だ」

「わかりました。平塚先生」

「ん?どうした?」

「比企谷くんがいないのですが……」

「あー、比企谷は今日は用事があつて帰ったぞ」

「そうですか」

一方その頃八幡は……

「大丈夫かな?あいつ変なやつに捕まってるかな……ヤバい!心配になってきた!」

俺としたことが平常心を保てないぜ!

実は今日は花丸が泊まりに来るんだよな。

なんせ日曜に総武高校でライブをするらしい。それでちょうど会えるなって話をしてたんだが金曜日練習が終わり次第こっちに泊まりたいと言われて(やましいことはしない)今に至る。

「ちよつと寒いな」

季節は秋、少し肌寒かった。温かいお茶でも買つとこうかね。

「花丸の分も買つとくか……」

「じゃあ今日は終わり！明日はオフだから明後日のためにしっかり休んでね！」

果南ちゃんがそうみんなに呼びかけた

「じゃあ曜ちゃん！梨子ちゃん！明日沼津の駅の近くに来たパンケーキ屋さんに行かない？」

「いいねー」

「いいわよ」

「じゃあ決定だあー！」

みんな久しぶりの休みなのではしゃいでいた。

「ずら丸はどうするの？」

「マルは今から千葉に行くずらー！」

「ずら丸ライブは明後日よ？」

「違うずらー！はちくんのお家に泊まりに行くずらー！……あつ、」

「ふーん（ニヤニヤ）」

善子ちゃん、いつか痛い目にあわせてやるずら。

「ピギイ！花丸ちゃん怖いよお〜！」

「はっ！もうこんな時間ずらー！じゃあみんな明後日ずらー！！」

「「「「「……これが愛の力」」」」」

その時の花丸の走りの速さは果南を超えていたんだとかなんだとか……

「着いたずらあー！！」

我ながらテンションが上がってるずら

それにしてもはちくんはどこだろ？

「花丸」

「あつ、はちくん！」

「久しぶり——って急に抱きつくなよ」

「ふふっ、だって久しぶりにはちくんに会えたんだもん！今日はずっと甘えてもいいよね？」

やめろ！その上目遣いいい！！

八幡のSAN値があああああああああ！？

「お、おう……／＼／＼」

「あ、今照れたすらね？」

「照れてねー！」

「凶星すら♡」

「んじゃ、行くか」

「うん」

前だったら恥ずかしくて手を繋ぐのも一苦労だったのに、今じゃ難なくできるようになったすら

だからなのか分からないけど、はちくんの手をしっかりと感じる事が出来るんだ。マルにはない大きくてたくましい手……なんか照れてきたすら／＼／＼

「ん？花丸顔赤いぞ？」

「ふえ!?ひよかな!?」

「なんだ今の？かわいいぞ（笑）」

「はちくんのバカ！／＼／＼」

やっぱりはちくんはバカすら

番外編 H a p p y b i r t h d a y ! 国木
田花丸

「「「「「誕生日おめでとう!」「「「「「」」

「みんなありがとうずらー!」

3月4日はマルの誕生日です。この日はA q o u r s のみんなに祝ってもらいました。マルはこんなたくさんの人達に囲まれて誕生日をお祝いした事が無かったからとつても新鮮ずら。

「みんな今日は本当にありがとうずらく、誕生日プレゼントもありがとうずらく」

「大切な仲間だから当たり前だよ」

「いいこと言うわね千歌ちゃん。でも明日から作詞頑張ろうね?」

「うう、梨子ちゃんの笑顔がこわい」

「千歌ちゃん頑張ろうね!」

「曜ちゃんまで!?!」

「じゃあもう一度言っところか」

千歌ちゃんがそう言うと、みんながマルに向かってもう一度言ってくれた。

「「「「「誕生日おめでとう!」「「「「「」」

「うん!ありがとう!」

こうしてA q o u r s のみんなが祝ってくれた誕生日パーティーは無事終わりを迎えたけど、マルにはもう1つやるべき事が残ってるずら。

「おじやましますー!」

「おう、いらっしや〜」

はちくんの家でお泊まりずら〜?!

「あれ?今日はおばさんとおじさんは?」

「ああ、今絶賛出張中だから居ないんだよ。あと小町も居ないな。」

「そ、そっか」

はちくんと二人つきりって事はもしかして、あんなことやそんなことが・って何考えてるずらか!?

「花丸顔赤いけど大丈夫か?」

「ふえ?!だ、大丈夫ずらよ!元氣全開DAY!DAY!DAY!DAY!ずらよ!!」

「せめて自分のユニットのやつにしるよ」

「晩ご飯作るけどA q o u r sのみんなで誕生日祝ったんだろ?大丈夫か?」

「マルはまだまだいけるずらよ?」

「(あんだだけ食べて太らないってどんな体質なんだろうな...)」
「??」

今更なんだけど、はちくんって料理作れる設定だったずらか?それはそれでスペックが高いずらね。どこかのはちくんはお肉を焼いてそのままご飯の上のつけてできたものを料理って言ってたよね。あつ、これじゃカオスずらね。

「できたぞ」

「うわあー!美味しそうずらく♪?」

「いただきます」

ご飯を食べながらA q o u r sのみんなが祝ってくれた話や昔話をして楽しんだ

「(ごちそうさまでした)」

「お腹いっぱいずらあ〜」

「(花丸の胃袋はどうなってんだ?)」

「あつ、花丸」

「なんずら?」

「これ」

そう言うってはちくんの手には1つの箱があった

「誕生日おめでとう」

「うん、ありがとう!」

「花丸開けてもいいぞ?」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

紐を解いて箱を開けると

「綺麗」

綺麗にひかる黄色の宝石のネックレスがあった。

「はちくん、これ」

「実はさ、最近会えてなかっただろ？その間にバイトとかしてたんだよ。これ買うためにな。それに前デート行った時このネックレスずっと見てたからさ」

「はちくん！」

マルは思いつきりはちくんに抱きついた

「うわっ！」

「本当に本当にありがとう！」

「おう」

「これからもマルの大切な人でいてね？」

「当たり前だろ？」

「ぶっ、あははははは！」

はちくん誕生日プレゼントありがとう。

誕生日プレゼントも嬉しいけど一番嬉しいのは今日という日はちくんと過ごせたことだよ。本当にありがとう。

朝

「ち、遅刻だ（ずら）ー！ー！ー！！」

あの後ダイヤちゃんにもものすごく怒られたのはまた別の話ずら

22話

「あ、花丸」

「どうしたずら？」

「ちよつとスープー寄りたいたんだけどいいか？」

「大丈夫ずらよ！何か買うの？」

「あー、晩ご飯の材料だな」

「そうずらかくええスープー!!？」

「ちよつ、急に大声だすなよ」

「ごめんなさいずら／／」

「とりあえず行くぞ」

「それにしてもはちくんが料理できるのは驚いたずら」

「そりや、将来は専業主夫だからな！」

「それを声を大にして言うのを恥ずかしいと思つて欲しいずら」

あれれ？おかしいな。

なんで花丸もそんなことを言うんだ？あつ、俺が悪いのか

「まあ、本当は前泊まりに来た時に花丸に頼りつきりだったからつて理由なんだけどな」

「そうずらか。それにしても何を作つてくれるずらか？」

今まで見たことがないくらいに目が輝いてるんだけど

「まあ、無難にか——」

「カレーライスずらか!？」

いや、なんですぐ分かるの？定番といえば定番だけでも

「そうだな、あとはスープぐらいか」

「」

「ん？黙り込んでどうしたんだ？」

「な、なんか一緒に買い物してると夫婦見たいずらね／／」

な、なんてこと言い出すんだよ！恥ずかしくなってきたじゃねーか

!!

「お、おう／／」

その後スーパーにいたおば様達から「若いわね」とか言われたりしてもっと恥ずかしくなったので買い物済ませてそそくさとスーパーでました。

く花丸sideく

「おじやましーす」

「おう、まあ入ってくれ」

なんか既視感があると思つたら前にも1回泊まりにきたはずらね

「あ、そういえばはちくん今日はおばさん達いないはずらか？」

「ああ、小町も居ないぞ。息子1人を置いてあいつら旅行に行きやがったんだよ。だから材料買ったただけだな。ま、花丸と会えたからいいけどな」

「なんでそんな恥ずかしいことすぐ言うずら!?!?!」

「いや、可愛いからだろ」

「はちくんが素直すぎるずらー!」

「そう言えばライブまであと3日もあるのにこんなところ来て学校は大丈夫なのか？」

「それならマリちゃんがこの3日間休みにしてくれただずら」

「えっ、なにその絵に書いたような職権乱用」

確かにまりちゃんはやる事が規格外すぎるずらね。

けど、こうやってはちくんの家にこられてるのもまりちゃんのおかげずらー!ありがとうまりちゃん!!

「ともかく飯まで時間はあるしのんびりしとくか」

「マルははちくんの部屋にいきたいずら!!」

「いったって何も無いぞ?」

「そんなことはないずら!エッ○な本ぐらいあるはずずら!!」

「あるわけないだろ!」

怪しいずらー!はちくんだって思春期ずらよ?絶対どこかにはあるはずずらー!

「とりあえず入れよ」

「あれ？思ってたより普通ずら」

「それは褒めてるんですかね？というかどんな部屋想像してたんだよ」

「もつとアニメ系のポスターとか」

「昔はあったけどな」

「なんのずらか？」

「プリキュア」

「聞かなかったことにするずら」

「おいまて！なんで急に俺を蔑んだ目でみるんだ!？」

プリキュアは想定外ずら。

ぐうぐ

／／／

「飯にするか」

「ずら／／／」

く八幡sideく

「やっぱりこの設定はおかしいずら!」

「なんだよ急に」

絶賛料理中なんだが花丸がずっとこんなことばかり言ってくる。仕方ないだろ？こういう時ぐらいスペック高くても。そこら辺の八幡とかとは違うんだよ！

すいませんでした。

「そんなにわちやわちやしてると怪我するぞ」

「分かってるずら!」

あれからお互い話をしながらも料理は完成した。

もちろんカレーライスを作った。出来栄は上出来である!もう一度言う・出来栄は上出来である!!

「自画自賛ずら」

あれれ？ハチマン声に出した覚えのないになあ？

あつ、もしかしてエスパーか、何かなの？

「いただきます！」

いや、そこは無視しないでええええええ!!

「美味しいぞら!!」

「そりや良かったわ。花丸と一緒に作ったんだけどな」

「それでもはちくと一緒に作って食べるのは格別ぞら!／／／」

「お、おう／／／」

やべーいーここに、ここに天使がいる!

「「ちそうさまでした」」

「いっぱい食べたぞら」

逆になんでそんなに食ってんのに太らないんですかね?むしろ

おっP・いや、何でもない(※某Y o u T u b e rのことではありません)

せん)

「この後はどうするぞら?」

「どうするっても風呂入って寝るしかないだろ。ちなみにもう湧いて

る」

「はちくんが先に入るぞら?」

「いや、花丸から入ってくれ」

「別に一緒でもいいよ?／／／」

「ぶっ!?!」

「冗談ぞら♡」

最近うちの彼女が大胆な件について

23話

「うん？」

朝目覚めるとそこには紛れもない美少女がいた

「いや、なんでいる？」

昨日は別々の部屋で寝たはずなんだが

でも、めつちや気持ちよさそうに寝てるし、起こすわけにはいかな

いな。とりあえず布団から出——!?

「でれねえ」

ガツチリと花丸さんに腕がホールドされていました。ヤバいね。

何がヤバいかって、国木田山脈が俺の理性を山頂アタックしてる事なんだよな！

「無理やりでも出して——」

「んっ、」

ちよつと花丸さん？そんなにえつちい声出さないで？お願いだから、ね？

「もう食べられないじゅらく♪」

やっぱり無理矢理にでもこの腕を抜こう

「うん？あ、はちくん・おはよう」

まだ眠たいのか目を細めながら挨拶している

「おはよう。そして君は何故ここにいるんだい？」

「何言ってるぞら？ここは小町ちゃんの家じゃない？」

「ここは俺の家だ」

「えっ／＼／」

おっと、急に顔が赤くなりやがったな！

相当恥ずかしいみたいだな。まあ、俺もそれなりに恥ずかしいんだけどね。

「ず、ずらああああああ?!／＼／」

その爆音波赤髪ツインテール美少女が担当じゃなかったっけ？

「は、はちくん。」

「どうした？」

「さっきはごめんなさいです。」

確かに急に叫んだのは驚いたけど、そこまで落ち込まなくてもいいのになあ。

「別に気にしねーよ。それよりもなんで俺の部屋にいたんだ？」

「そ、それはくちよつと恥ずかしいから言いたくないかな？／＼／＼」

「お、おう」

朝食食ってるのになんでこんな甘々な空気に包まれてるんだろうね！朝食が全部甘く感じるわー

「そういえばはちくん！」

「うん？」

「今日は何するんですか？」

「あー、今日はな。お前ら明後日ライブだろ？その設営しに行かないといけないんだが、どうする？」

「ついに行くぞら！！」

「わかった。は？」

「楽しみずら〜♪」

えっ、ほんとに来るの？こんな甘々なところ見られたら雪ノ下や由比ヶ浜にどんな目をされるか。

というか付き合ったことも言っただけえしなー

「あ、あの花丸さん？」

「はちくんがなんと言おうとマルは行くぞらよ？」

えっとね、エスパーなの？もうエスパー乗り越してニュータイプなの？

「マルはどっちでもないぞら」

「いや、絶対ニュータイプだな」

あれから説得を続けたものの花丸は頑なに行きたいと主張したので仕方なく連れていくことになった。

べ、べつと一緒に学校行くのが実は楽しみなんてこれっぽっちも思っていないんだからね！

「それで何で手繋いでるんですかね？」

「昨日は繋いでくれたすら」

「いや、学校はちよつと」

「お願いすら♡」

そんな上目遣いやめて！断れないってばよ!?

おっと、動揺しすぎてどこかの忍者がでてきちまったじゃねえか。

「やっぱり温かいすら」

／／／

「ふふっ、はちくん顔真つ赤すらよっ」

「言わないでくれ／／／」

このまま結局学校まで手を繋いだ状態で来てしまった

離そうとしたらめっちゃ握り返してくるし、腕に柔らかい感触はく

るし、あく、天国だった

「あつ、平塚先生」

「おつ、やっと来たな比企谷とどちらさまだ？」

「あつ、オラじゃなかったえつと、国木田花丸と言います。明後日のライブに出させて頂くAquoursのメンバーです。よろしくお願いします。」

よく方言出なかったな。よく頑張った！後で何か買ってあげよう。

「こちらこそよろしく国木田」

「はいー」

「ところでなんで比企谷の腕に抱きついてるんだね？」

「平塚先生それは——」

「はちくんはマルの大切な彼氏だからです!!」

いや、そんな堂々と胸を張って言わないでくれ！恥ずかしい!!／／

／

「ははっ、比企谷どうやって騙したんだ？」

「いや、待ってください！なぜそんな方向になるんですか!？」

「比企谷に彼女などいるはずが・マジなのか？」

「マジです平塚先生」

「そうか・私はいつまで経ってもできんというのに、比企谷、君だけは許さん!!」

「完全に八つ当たりずら」

「花丸ってそんなに言うタイプだっけ？」

「最近は特にずらね」

「あの一、私の事忘れてないか？」

ともあれ、あの後平塚先生は何とか我に戻って、事情を言うと花丸に学校の許可証をくれた。正直かなりワガママな事情だったんだが平塚先生が優しくして良かった。平塚先生も用事があるらしく、奉仕部まで一緒に行くことになった。

「入るぞ」

平塚先生いつもノックしてから入ってくれて雪ノ下に言われてたんじゃないの？

「平塚先生ノックしてから入ってきてください」

「すまんすまん雪ノ下」

「こんにちは！平塚先生！」

「こんにちは由比ヶ浜」

由比ヶ浜が珍しくやつはろー！って言わないだど!?

先生の前だから当たり前か。

「こんにちは一！」

あれれ？なんで一色いるの？怖いんだけど

「うーす」

「あつ！ヒッキーだ！やつはろー！」

「おう」

「もう！反応薄いよヒッキー！」

「こんにちは比企谷君」

「おう、雪ノ下」

「もうっ！無視しないでよー！」

「先輩遅いですよー！」

「はいはい、すいませんね」

「よし！全員揃ったことだしスペシャルゲストを呼ぼう！」

待ってくださいよ！いつから一色は奉仕部になったんですかね？

てか、生徒会の仕事大丈夫なの？副会長可愛そすぎやしないか？今度ご飯奢ってあげよ（絶対とは言っていない）

「入ってくれ」

「し、失礼しまーす」

「あっー」

「由比ヶ浜さん？一色さん？どうしたのかしら？」

「ゆきのん！あの子って今度うちでライブするAqoursの——
」

「国木田花丸と言います。よろしくお願いしますずら。」

由比ヶ浜と一色はほつとくとして、花丸方言出ちやったな。顔が赤いぞ。

「またずらって言っちゃったずら／＼／＼はちくん恥ずかしいずら／＼／＼」

「はあー、後でコンビニでおやつ買ってやるから」

「ありがとずら〜♪」

おやつという言葉だけでこんなに目をキラキラさせる女子高生がいるだろうか？それよりもなんか黒いオーラみたいなものが

「「はち……くん？」」

あらっ？これはまずい流れでは？

「どういことかなヒツキー？」

「どういことかしら比企谷君？」

「どういことですか先輩？」

いや、なんで俺こんなに怒られてるの？もしかして俺の事好きだったの？まあ、そんなわけないけどな。うん？花丸急にドヤ顔してどうした？なんか嫌な予感が——

「はちくんはマルの大切な彼氏ずら!!」

「」

「「えっ————!!?」」

「やっぱり花丸にはおやつ抜きだな」